

論文番号 48

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

The protective effect of moderate alcohol consumption on ischemic stroke

適量アルコール摂取の虚血性脳卒中に対する予防効果

執筆者

Sacco RL, Elkind M, Boden-Albala B, et al.

掲載誌 (番号又は発行年月日)

JAMA 1999; 281(1): 53-60

キーワード

アルコール摂取、虚血性脳卒中、脳梗塞、多民族、都市部

要旨

背景

適量のアルコール摂取は冠状動脈心疾患の予防に有益だと考えられているが、適量飲酒と虚血性脳卒中の関連については論争があり定説がない。飲酒と虚血性脳卒中の関連を検討した。

対象と方法

The Northern Manhattan Stroke study (NOMASS)は、多民族かつ都市部居住の住民を対象として脳卒中の危険因子や予後の解析を目指した研究である。対象地区には1990年時点で約26万人が居住し、40%が40歳以上、20%が黒人、63%がヒスパニック、15%が白人である。ここに居住して電話を有する40歳以上の1993年7月以降の初回脳梗塞発症者を症例として登録した。対照群として、16,000世帯にランダムに電話をかけて、そのうち電話を保有し同一地区に3ヶ月以上居住している、40歳以上で脳卒中の既往歴がない者を抽出し、性、人種/民族、年齢(5歳以内)をマッチングして選択した。これらの対象者に面接調査や医学的検査を実施し、症例677人、対照1,139人を比較した。飲酒習慣は、過去1年飲んでいない、月1drink未満、月1drink以上かつ1日1drink未満、1日1drinks以上かつ1日2drinks以下、1日2drinksより大で5drinks未満、1日5drinks以上の6群に分類した(1drinkはエタノールで15g程度)。

結果

症例(虚血性脳卒中、脳梗塞)は、対照に比し、高血圧、心臓病、糖尿病を高率に有しており、喫煙率もやや高かった。逆に学歴、肥満度は低い傾向を示した。過去1年飲んでいない群を基準とした飲酒と虚血性脳卒中の非調整オッズ比は、月1drink未満、月1drink~1日1drink未満、1日1drink~2drinks以下、1日2drinks~5drinks未満、1日5drinks以上のそれぞれで、0.37(95% C.I. 0.25-0.55)、0.43(0.33-0.57)、0.51(0.30-0.86)、0.58(0.36-0.96)、1.39(0.70-2.76)であった。他の危険因子を調整した時のオッズ比は、過去1年飲んでいない群を基準(1.00)とすると、適量(moderate; 月1drink未満~1日2drinks以下)で0.58(0.39-0.67)、中間量(intermediate; 1日2drinks<かつ5drinks未満)で0.58(0.33-1.03)、大量(heavy; 1日5drinks以上)で1.63(0.74-3.62)であった。この関連は、男女別、年齢別(65歳以上と未満)、民族別(黒人、白人、ヒスパニック)に分けて解析しても同様であった。飲酒と虚血性脳卒中の関連で二次方程式モデルを作成すると、2~3drinks/dayをボトムとするJシェイプとなり、7drinks/day以上では有意に高いオッズ比; 2.96(1.05-8.29)を示すことが明らかとなった。この防御効果は、アルコールの種類別(ワイン、ビール、リキュール、混合)に差を認めなかった。

結論

この高齢、多民族、都市の集団では、適量のアルコール摂取は虚血性脳卒中のリスクの減少と独立した関連要因であったが、大量飲酒はかえって有害であった。この結果は国立脳卒中協会の予防ガイドラインに合致している。